



## 怒ったら負け、だから

荒井悦代

その日は、私がスリランカで籍を置いていた大学で学する講師の送別会だった。昼になり、車にぎゅうづめに分乗して予約していたレストラン

の従業員を問いただしていたかもしれない。ねえ責任って言葉知ってる？と。

別の日、私は新聞ですてきなレストランの広告を見つけた。コロンボの中心部にスリランカの田舎の風景を再現したレストランだという。こんなレストランがあればいいのと思っていたのだ。新聞情報では、どうもホテルに併設されているらしいが、場所がはつきりしない。よくあることだ。地図が間違っていて、炎天下でさんざん迷ったこともあった。今回はホテルに行つて聞けばいいことだ。ロビーで一番いい服を着ている従業員に聞いてみた。その辺のアンチャンに聞いてもだめだと経験上分かっていたから。流暢な英語で道案内を受けレストランに向かった、はずだった。しかし、辿り着けなかった。

ンに乗り込んだ。しかし、いつまでたつても席に案内されない。どうやら、予約の際に行き違いがあったようで、送別会の幹事は大学から最も近い支店Aに電話をしたつもりが、別の支店Bに電話をかけていた。幹事は支店があることを知っていたので、予約の際にAです、と確認した。ここで店の従業員は「違いますよ。うちはBです」と答えてくれればいいものをなぜだか「はいはい、うちはAです」と答えていたのだそう。

すでにこの時点でみんな腹ペこになっていてもいい時間帯だった。しかし大人数なので、予約のないAでは対応できないという。再び車に乗り込み少し離れた支店Bに向かった。Bでようやく食事でありつけたのだが、私が驚いたのは、幹事も店の従業員にも、だれも怒らないし不服も言わないということだった。穏やかに席に座り、談笑し、平和に会食して同僚の門出を祝つたのである。日本ならどうだったろう。私だったら幹事か店

り、怒ったりもしない。また出かければいいやと構えている。スリランカは暑いし交通機関だつてスムーズでないのに。

正確な情報があれば確かに時間を有効に使えるし、余計に支出したり、疲れたりしないで済む。費用対効果を重視するビジネスにおいて正確な情報は絶対に必要だろう。でも、生活の細々した部分にかつちり正確な情報とそれを提供する責任を求めるのはどうなのだろう。

正確な情報を相手に期待しないことでストレスが減つてすつきりするかもしれない。高級ホテルのスタッフに悪気はない。善意なのだ。彼は仕事として責任を果たすためにレストランの場所を教えたのではなく、外国人が困っていたから善意で対応したのだ。きつと。そう思えば腹も立たない。それに有効に使つた時間やエネルギーを私はどんな風に使つているかと言つたら、せいぜい夕食後テレビを見ながらくつろぐ時間を増やすくらいだ。節約したお金もおやつを余計に買うくらいだ。

代金や税金を払つているのだからそれなりの対価を受け取る権利があると主張してもいいけれども、そんなに相手の責任を問いただしても、相手が認識していないと、却つていらいらしてしまうだろう。それよりも適当に期待して、目の前の現実にあるその場で対応した方が楽かもしれない。少なくともスリランカでは。

そう、少なくともスリランカでは。日本に戻り、私はすぐに日本の情報提供が正確であること、正確な情報を提供しようという姿勢に感動した。ああ、やっぱり便利だわと。その一方であまりに正確な情報を求め、相手に責任を求めめる偏狭さは、そのうち自分の首も絞めることになるかもしれないと思つてしまった。

あらい えつよ/アジア経済研究所南アジア研究グループ

写真：カウドゥッラ国立公園の象（筆者撮影）

専門 現代スリランカの政治・社会  
1994~96年、2008~10年海外研究員としてスリランカに滞在。